

神戸川の河川環境について

中村 幹雄

○今後のあり方

1. **維持水量**を科学的に再検討する。それにより河川流量の増量を考える

2. **アユの放流量を増加させる**

神戸川のアユの漁獲量の減少は、もちろん河川環境の人為的な改変が大きな原因の一つであるが、アユの放流量の減少も大きな原因である。

アユの漁獲量を増加させるための有効な対策は放流量を増加させることが大切である。

斐伊川・神戸川漁業調査報告書（昭和59年）の中で水野信彦は神戸川の放流アユの最低必要数を 190 万 m^2 （漁場面積） $\times 0.7 \approx 133$ 万尾としている。

そして漁獲分や減数分を上積みすると望まれる放流尾数は330万～500万尾となるが、**現在は適正放流量の約1/10の39万尾にすぎない。**

まずはアユ放流量の増大することがアユ漁獲量増大につながると考えている。

3. 「黒い水」に関して

「黒い水」が問題になっているが、その現状把握と原因究明は今後の課題になると思われる。

「黒い水」の対策として、私は橋波地区に試験的に大量のアユを放流することを提案する。

昔から「アユが石を磨く」、「アユが清流を作り出す」と言われるようにアユは絶えず石に付着している藻類をこそぎ取るので川底はアユによって磨かれる。

アユがいないと腐りかかったへドロ状の藻が堆積し川底を悪化させ、舞い上がったへドロ状の水が川を汚す。

従って「黒い水」の対策にはアユの大量放流が有効であると考えます。

4. 神戸川の**漁業調査が必要**である

昭和52～54年に県や国が神戸川の環境・生物・漁業についてしっかりとした調査を実施している。その調査を参考にして同じように調査を行うべきである。

5. 神戸川の漁業振興に関する**専門委員会の設立**が必要である